

ともに喜びをもって生きよう

■ 第一回福音宣教推進全国会議にごたえて ■

兄弟姉妹の皆さん

第一回福音宣教推進全国会議・NICE―87（以下、第一回全国会議と略します）を通して、私たちは、代表者の方々はもちろんのこと、長い間、祈り、考え、話し合い、実践をもってこの集いを準備してくださったすべての兄弟姉妹の皆さんと語り合うことができました。これは、私たち司教一同にとってほんとうに大きな喜びでした。ここに深く感謝いたします。

第二バチカン公会議は、現代社会における教会の刷新を打ち出しました。私たちは、その歩みを日本においてさらに進めたいと願い、四年前に発表した『日本の教会の基本方針と優先課題』の中でこの集いの開催を呼びかけました。そして、各教区からのご意見をもとに「開かれた教会づくり」をその課題といたしました。

代表者の方々は、数はきわめて限られていましたが、各地でこの課題について行われた草の根の話し合いをふまえて参加され、「私たちは教会である」との自覚と、福音宣教のために何かしたいという熱意を会場いっぱいにみなぎらせ、私たちを希望で満

たしていただきました。

このたび、私たちは、司教団として一堂に会し、第一回全国会議から提出された『答申』について話し合い、改めて深い感銘を受けました。その中に込められた皆さんの思いを「聞き、吸い上げ」、どうしたらそれを「活かせる」かについて真剣に話し合いました。そして、私たち司教をはじめとして、神の民すべてが、教会の姿勢や信仰のあり方を見直し、思い切った転換を図らねばならないという結論に達しました。

その転換の中軸は、次の二つの言葉「ともに」および「喜び」で表すことができます。と思います。

「ともに」

まず第一に、社会の中に存在する私たちの教会が、社会とともに歩み、人々と苦しみ分かち合っていく共同体となることです。まさに、ご提案くださったように、皆さんとともに、しっかりした機関をつくり、福音に照らされた諸問題解決の指針を見だし、それを教会と広く社会に伝達していかねばならないと痛感いたします。

また、教区、小教区を、そこに属する信者のためだけの共同体から、その地域に住むすべての人々とともに福音的に生きようとする共同体に変えなければなりません。

そのためには、信徒、司祭、修道者、司教が、それぞれに固有の役割を明確にしなから協力していかねばなりません。また、高齢者、青年および女性の使命についても明確にしていく必要があります。

そして、裁く共同体ではなく、特に弱い立場におかれている人々を温かく受け入れる共同体に成長したいと思います。

さらに、他の小教区、教区とともに生きる共同体になりたいと思います。一方、日本の教会という立場から言えば、特に同じアジアの人々とのかわりが大切です。

このように、「ともに」生きることによつてこそ、私たちの信仰は養い育てられます。そして、私たちは、「来たらんことを」と日々祈る神の国の到来のしるしとなることができるのです。

「喜び」

信仰を、掟や教義を中心としたとらえ方から、「生きること、しかも、ともに喜びをもって生きること」を中心としたとらえ方に転換したいと思います。というのは、信仰生活は、私たちとともにいてくださる神のみ前で、人々とともに、キリストの福音を信じる「喜び」に生きることだからです。

そのために、典礼を単なる義務の対象、順守すべき儀式ではなく、いつも私たちとともにいてくださる神と交わり、「ともに生きる喜び」を体験し、分かち場にしていかねばなりません。ここでも、皆さんとともに、人々の心の琴線に触れるような典礼を生み出す努力が求められます。

以上のような姿勢の転換によって、現代の日本の社会で、人々の苦しみを、個人としても、共同体としても敏感に受けとめ、それらの根源となっている問題の解決に取り組みましょう。それぞれの役割をもって、互いに励まし合い、助け合い、そこに喜びを見いだしましょう。それは、キリストにより近づき、教会の長い豊かな信仰の伝統に沿うことです。なぜなら、このような生き方こそ、キリストご自身がお始めになり、それを続けるよう教会に託されたものだからです。

司教団としての取り組み

私たちがこれからの教会の歩む方向について考え、願っていることを確認した上で、皆さんが第一回全国会議を通じて提案してくださったことがらについて、私たちの話し合いの結果をお伝えしたいと思います。

私たちは、諸提案を大きく二つに分けて取り組むことにいたしました。まず、司教団として直接取り組むこと、そして、教区・小教区として取り組むことです。

司教団としての取り組みについては、今はまだその構想についてしかお話できない段階です。

まず、司教団としてやるべきことを総合的に計画し、全体的に実施を推進していくグループを司教団のもとにつくります。私たちは、司教団の中から、島本要（浦和教区）、松永久次郎（長崎教区）、森一弘（東京教区）の三司教をそのメンバーに選びましたが、皆さんの中からもぜひそこに加わっていただきたいと考えています。このグループのもとに、分野別に取り組むチームがつくられると思います。

しかし、『答申』の中で最も強く指摘された点、すなわち、「教会が生活と社会の現実とその諸問題を把握、分析し、そこに福音の光を与え、福音の光に基づいた問題解決の指針を、教会と広く社会にも伝達するための機関を充実する」ことと「信徒、修道者、司祭、司教のための生涯養成を確立する」という提案については、緊急にプロジェクト・チームをつくることにいたしました。

この他の、司教団として取り組むべきことについても、このグループが研究、準備を重ねて、順次実施方法を考えていくはずです。

このグループのもう一つの役割は、次の全国会議への道筋を定めていくことです。もちろんそれは次の全国会議をこのグループが準備するというのではなく、どう準備していくべきかを考えることです。

教区・小教区で取り組むこと

皆さんからの提言の中には、司教団として取り組むべきだと思われること以外に、各教区で小教区を中心に取り組んだほうがよいと思われるものもありました。

それらについては、各教区で状況を勘案して順次取り組むことにいたしました。その中には、特に小教区に関することが多く、主任司祭の指導と奉仕がたいへん重要です。これらすべての実現には、私たち司教も、司祭、信徒、修道者の皆さんも、同じキリストの霊に導かれて励んでいきたいものです。聖霊に信頼して前進いたしましょう。

おわりに

神の国の実現は、神ご自身のみわざであり、私たちは神の働き手です。私たちは、力も弱く、貧しいものです。間違うこともあります。失敗することもあります。それを恐れて尻込みしたくなるかもしれません。しかし、「ともに」おられる神は裁きの神ではなく、愛と救いの神です。恐れずに挑戦しましょう。

第一回全国会議の中に示された時のしるしを認め、聖霊の導きに支えられて、これから、なおいつそう、生活から信仰を、社会の現実から福音宣教を見直しつつ、特に

さまざまな状況の中で苦しみあえぐ人々と労苦を分かち、同じ神に愛されている兄弟姉妹として、ともに歩むよう努力いたしましょう。さらに、同じアジアおよび全世界の、善意をもって働くすべての人々と手をつなぎ、現代社会でキリストの福音を待つ人々にこたえていくことができる「開かれた教会」を実現いたしましょう。

末筆ながら、この第一回全国会議開催のために陰で献身的にご奉仕くださった京都教区の皆さんと、元気いっぱい会議を支えてくださった青年書記団の皆さんに改めて心からのお礼を申し上げます。

一九八七年十二月十八日

皆さんの兄弟として

日本カトリック司教団

資料

『答申』の各提案について司教団で審議した結果

以下は、司教団が第一回福音宣教推進全国会議『答申』の各提案について逐条審議した結果を要約したもので、カトリック中央協議会事務局で作成した。

『答申』の各提案および提案理由の部分は小さな字で、司教団の審議結果は線で囲み大きな字で入れてある。

柱Ⅰ「日本の社会とともに歩む教会」

生活から信仰を、社会の現実から福音宣教のあり方を見直していこう、という司教団の呼びかけにこたえて、教会が真に社会とともに歩むため、次のような具体案を提出します。

提案Ⅰ

教会が生活と社会の現実とその諸問題を把握、分析し、そこに福音の光を与え、福音の光に基づいた問題解決の指針を、教会と広く社会にも伝達するための機関を充実する。

具体的には、

- ①各分野で活躍するカトリック者の協力態勢をつくる。
- ②具体的に社会の各分野で活躍する既存の諸団体・研究機関の協力態勢をつくる。
- ③とくに司教団のブレーン機関の充実および情報伝達的手段（カトリック新聞など）を確立する。
- ④このための財政基盤を確立する。

提案理由

私たちが生きている社会では、人間の尊厳が傷つけられ、企業の論理が人間およびその家族の営みを左右し、自然環境も徐々に破壊され、平和も脅かされ、世界ととくにアジアの人々との真の連帯も問われています。こうした社会の中で、司教をはじめとし、司祭、修道者、信徒が戸惑い、途方にくれ、行き詰まり、時には流されている事実がこの会議で指摘されました。

そこで、現状を分析し、そこに福音の光をあて、いかに具体的にかかわるかの答えを切実に求めました。これにこたえることが、日本の教会が本来の姿を取り戻すと同時に、日本の社会に対して福音的使命を果たすことができると確信し、上記の提案をします。そして、この点に関して、日本の教会全体に対する司教団の強いリーダーシップを求めます。

司教団の審議結果

参加代表者の中で、この提案の支持者がもつとも多く、司教団のイニシアティブを強く期待していることを重視し、緊急にこれに取り組むため、いろいろな人の協力を求めて、プロジェクト・チームをつくる。このチームの役割は、既存の人や組織・団体の協力態勢と司教団のブレンとをつくることにある。このブレンが学者や専門家のみの集団に偏らないで、むしろ社会の現実やそこに生きる人々の心を敏感にくみとれるものになりたい。

提案2

信徒、修道者、司祭、司教のための生涯養成を確立する。

- ① 信徒、修道者、司祭、司教のための常設生涯養成制度を確立する。
- ② 現場と密着した体験学習、とくにアジアの人々との交流を通してそれを行う。
- ③ 神学、典礼、要理教育などを、人間の尊厳を視点として総合的に見直す。

提案理由

1 これまでの教会の信仰教育には社会とのかかわりの視点が欠け、それが、教会と社会との遊

離、信仰と生活の遊離をもたらしていた事実を反省した上で、社会とともに歩み、人々と苦しみ分かち、社会の良心となり、新しい社会の建設に貢献できる人々を育てる養成プログラムをつくり、それを実施することが必要です。

2 差別や抑圧に苦しむ人々との具体的な交わりは、キリスト者および教会の成熟をもたらすものです。というのは、この人々の苦しみ、悩み、祈り、現状をよりよいものにしよとする姿の中に、とくに福音が活かされているからです。この福音の息吹きに支えられた生涯養成が必要とされます。

司教団の審議結果

生涯養成の制度化は、重大な課題であるが、総合的なプランづくりが必要と思われる。これについてもプロジェクト・チームをつくり、実施の計画と具体的方法を検討してもらう。この養成には神学生教育も含めて考える。既存の養成グループや制度の協力も求める。

提案3

カトリック学校の現状と課題を再検討する。

提案理由

カトリック学校は、日本社会に福音の光を伝えるためのもっとも重要な場の一つです。しかし、現代の日本の教育の複雑な状況の中で(受験競争、経営問題など)、多くの困難な問題を抱えています。この問題は、関係者とともにさらに検討する必要があります。

司教団の審議結果

これは、「関係者とともに」検討することが必要なので、学校教育委員会を中心にプランを練る。

提案 4

社会的に弱い立場におかれている人々の必要にこたえる態勢(相談窓口、カウンセリグ、駆け込み所など)を充実し、彼らとともに、その原因となっている環境や社会構造の交革にも取り組む。

提案理由

現在、社会的に弱い立場におかれている人々を受け入れる教会の態勢は不十分であり、また環境や社会構造にも働きかけることなしには根本的な解決にならないからです。

司教団の審議結果

教区レベルで、小教区、修道会、ボランティアなどに協力を呼びかけ、現場中心に取り組む。超教区的な取り組みが必要な際には、ネットワーク化を図るようにする。

特別提案

離婚者、再婚者（教会法上の重婚者）に対して、司牧や教会法などあらゆる面での対応を総合的に再検討し、福音の教えにかなった解決を見いだす。

提案理由

教会が真に社会とともに歩み、苦しむ人々にとって福音となるためには、この問題への対応を、心理学、社会学、神学、教会法、司牧などの面から総合的に再検討し、解決を見いだすことが必要です。

なお、この提案を特別提案としたのは、柱Ⅰの「分団提案まとめ」の中では少数意見として述べられていたことが、柱では多数の分団から提案されていたからです。

司教団の審議結果

まず、今でもこの問題への対応には種々の可能性があるので、司教団として、それを司牧的に応用できるよう指針をつくり、担当者の研修を計画する。さらに、どうすれば「福音になつた解決」になるかを慎重に検討する。

柱Ⅱ「生活を通して育てられる信仰」

生活から信仰を、社会の現実から福音宣教のあり方を見直していこう、という司教団の呼びかけにこたえて、生活を通して信仰を育てるために、次のような具体案を提出します。

提案Ⅰ

職場で、小教区で、家庭で、地域で、あるいは職能別、世代別に、分かち合いの場を設け、そこでお互いに信仰を育てることを養成の基本方針にすえる。

提案理由

日常の生活を営む中で、家庭人、職業人としても、キリスト者としても、問題や悩みが生じます。しかし、それを分かち合う場があまりにも少ないのが現状です。これからは、職場で、小教区で、家庭で、地域で、あるいは職能別に、世代別に「分かち合いの場を設ける」こと、あるいは、さ

らに明確に「グループをつくる」ことが必要です。私たちは、だれかがだれかを一方的に育てるのではなく、仲間同士互いに分かち合うことによって信仰が育つのだという確信に至りました。以下、この分かち合いの特徴を列挙します。

1 この分かち合いは「本音で」なされなければなりません。

2 そのためには、種々の理由（家族の理解の問題、単身赴任など職業上の問題、中絶、離婚など）にとまなう倫理上の問題など、いろいろな理由が考えられます）で苦しむ人々を、裁いたり、疎外したり、なおざりにしたりせず、仲間としての分かち合いに積極的に迎え入れ、彼らとともに問題の解決を見いだす努力をすべきです。

3 また、この分かち合いには日常の祈りが欠かせません。なぜなら、生活と信仰を結びつけるのは祈りだからです。したがって、生活と信仰を結びあわせるような祈り方を学び、あるいは創造する必要があります。

4 分かち合いの内容は、職場で、家庭で、あるいは、青年として、労働者として、などなど、日常生活上の問題、悩みから、キリスト者として持つ問題に至るまで、さまざまな問題とその解決への道で、それらを話し合うこと、聴き合うことですが、時には実際に体験し合うことをも含みます。

提案2

このような日常生活レベルで信仰を育て合う営みを支持し、推進するため、司教団として次の点について具体的な方策を打ち出し、実施する。

- ① 司牧上の配慮（分かち合いのリーダーの養成、女性、青年の声を活かす配慮、グループ活動の推進など）。
- ② 日常生活と信仰を結びつけるような手引書、要理教育書、祈禱書（とくに家庭での祈りのため）、聖歌集の作成。
- ③ 倫理とくに性の倫理。
- ④ 職場、家庭、小教区、地域などで、あるいは職能別、世代別などで分かち合いの場を設けられるような制度づくり。
- ⑤ 教会法の面での対応。
- ⑥ 秘跡の執行。
- ⑦ 相互に助け合い、育て合うための人材の発掘と活用。
- ⑧ 社会に対する教会の所信表明。

提案理由

提案1と2にあげたような、生活の中で信仰を育てる努力は、司教団としての認知と行動をと

なわなければ、結局、有志の個人レベルのものにとどまり、かけ声だけのものになってしまします。

司教団の審議結果

両提案は合わせて考慮すべきものと理解した。姿勢として大いに呼びかけたい。具体的には、司教団として研究し、各方面の協力を得てできることから始めていく。すでに、成人信徒用要理書、祈禱書など一部取り組んでいるものもあるので、そこに、提案の趣旨を活かす。

提案3

教会共同体における青少年の使命と役割を積極的に評価し、ともに学び、彼らが現代の諸問題に直面するとき、ともに考え、協力できる態勢をつくる。

- ① 青年の自主性を尊重し、信頼し、彼らに発言と活動の場を提供する。
- ② とくに幼少年の信仰教育をさらに充実させる。
- ③ 性、愛、その他青少年期にぶつかりやすい問題の解決に適切な助けができるように具体的な態勢をつくる。

提案理由

青少年は、力であり、希望です。しかし、現実の教会は、青少年にあまり魅力がなく、青少年の育成も不十分です。

青少年が直面する現代の諸問題の多くは、おとな社会がつくりだしたものであることを直視し、青少年を問題として考えるのではなく、青少年が提起する問題を、彼らとともに学び、ともに解決する発想が必要です。

司教団の審議結果

教区、小教区と青少年委員会の強化などでこたえる。

柱Ⅲ 「福音宣教をする小教区」

生活から信仰を、社会の現実から福音宣教のあり方を見直していこう、という司教団の呼びかけにこたえて、真に福音宣教をする小教区となるため、次のような具体案を提出します。

提案1

社会（地域）に仕える教会となるため、教会の姿勢を、内向きから、社会に参加し、奉仕する姿勢に変える。

提案理由

教会（小教区）を会員制のクラブのように信者だけがメンバーと考える発想を転換したいと思いません。地域内に住むすべての人、訪れてくるすべての人は神に愛された人、信者は、この人々が福音的に生きることができるよう奉仕する人々です。

信者中心の内向きの教会から、ともに社会に奉仕する外向きの教会に変えなければなりません、まずそれは地域社会との交流、参加から始まります。発想の転換と実際の行動が大切です。

司教団の審議結果

これは姿勢と発想の転換である。いろいろな機会に大いに強調する。

提案2

人の心に訴えるような典礼を生み出す。それは次のような典礼である。社会に目を向け、宣教のエネルギーとなるような典礼（ミサ）。

キリスト信者でない人々にも理解しやすい典礼（たとえば、結婚式やクリスマス）。

日本の生活習慣に基づき、人々が受け入れやすい典礼や教会暦（元旦、七五三、死者の祭祀など）。

翻訳でなく、私たちの真の信仰表現となる典礼。

提案理由

現在の典礼は、日本人には分かりにくく、宣教のエネルギーを生み出す力も足りません。典礼文にも宣教へ向かわせる内容をもっと盛り込むことを希望します。また、生活習慣に対応して、信者でない人の心にも訴える平易な典礼を望みます。

司教団の審議結果

典礼は司教団がイニシアティブをとるべき問題である。『答申』では、宣教の場、宣教の力となる典礼が求められているので、宣教司教委員会と司牧司教委員会が合同で考えていく。

提案3

女性の参加の場を広げ、奉仕職(侍者など)、意思決定を含めた教会の運営に女性の対等な参画を実現する。

提案理由

現在の教会は、男性中心社会です。それを是正して、女性に対しても開かれた教会となり、女性の力と役割をもっと活かすべきです。

司教団の審議結果

まず姿勢の問題である。司教団にも、教区・小教区にも当てはまる。教会の意思決定に女性の参画を認めることは大いに奨励すべきだが、現段階で、司教団がこれを女性にと決定するより、現場の具体的な試みを支持していく姿勢で臨むほうが賢明であろう。

提案 4

教会内の協力態勢を確立する。

そのために、次のことが必要である。

- ① 信徒と司祭の役割の明確化。
- ② 信徒と司祭、司祭と司祭の対話と交流の促進。
- ③ 司祭、修道者、信徒からなる宣教チームの育成。
- ④ 宣教に向けて信徒と司祭がともに養成を受けられる場の設置。

⑤司祭の共同体意識の育成。

⑥社会における信徒の種々の活動の正当な評価。

⑦共同司牧、小教区間の協力態勢などの確立。

提案理由

小教区が真に宣教に向かって開かれるためには、小教区内外における協力態勢が不可欠です。また、そのために、対話を促進しなければなりません。

司教団の審議結果

養成にも関連がある。教区が力を入れていくべき問題の一つ。イニシアティブは教区レベルでとる。司教団としては、「優先課題2」検討小委員会が協力する。提案5とも絡む。

提案5

小教区制度の抜本的見直しと再編成を検討する。

提案理由

地域割りを基礎とした現行の小教区制は、現在の社会状況の中でいくつかの困難があります（たとえば、マンモス化、交通事情、過疎化など）。小共同体（たとえば基礎共同体）などの試み、近隣小教区との交流、場合によっては再編成が必要です。また、均等化だけが再編成の意図ではなく、各小教区の特性にも配慮する必要があります。

司教団の審議結果

「制度」が問題となっているように見えるが、小教区のあり方、中味がまず問題となっているのではないか。その点では、提案4も絡めて、教区レベルで取り組むべき問題である。

提案6

教区を越えた人材の活用や交流、財政的協力（たとえばプール制）などを図る。日本の教会の十六教区制度を再検討する。

提案理由

協力態勢は、全国にも教区を越えて広がらなければなりません。適材適所の観点から、また、よ

り広い視野からの活動のために、日本を広く考えたいと思います。

司教団の審議結果

司教団としては取り組む気持ちがあるが、まず現場の司祭たちの声を聞くところから始めたい。なお、提案4、5、6は、総合的に取り上げるべき問題も含んでいる。

付記 以上のすべては、神の恵みを祈り求めることはもちろんのこと、財政的にも人材の面でも、しっかりとした裏づけがなければ、机上の空論に終わってしまいます。右記提案の実現のために、司教団のご尽力をお願いするとともに、私たち一同も、精一杯の協力を惜しまぬことをお約束いたします。

以上

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお、点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

ともに喜びをもって生きよう

1988年1月13日第1刷 発行

頒布価 60円

1988年6月20日第3刷

日本カトリック司教団教書

発行所 カトリック中央協議会

102 東京都千代田区六番町10-1

☎03-262-3691
